山口大学教育学部研究論叢　第68巻　47頁～53頁　2019年1月

道徳的視点からみた大正期児童作品に関する研究
－博労小学校所蔵作文及び習字作品に着目して－

松岡　敬興・蜂谷　昌之*

A Moral Analysis of Children's Works from the Taisho Period:
With a Focus on Written Compositions and Calligraphic Works Stored
at Bakuro Elementary School

MATSUOKA Yoshiki, HACHIYA Masayuki *

(Received September 28, 2018)

Abstract

This study analyzed works completed by children in the Taisho period from a moral perspective. Written compositions and calligraphic works stored at Bakuro Elementary School were examined. While considering changes in the content of moral education from the Meiji period to the pre-war period, a moral analysis of the work content was conducted.

The study found that although students' pictorial work reflected the principle of Taisho liberal education, the leading educational ideology during those days, the content of the calligraphic works often reflected the principles of moral education since government-designated calligraphy textbooks were used to provide examples for the children. For written compositions, the number of titles related to the principles of moral education tended to increase slightly in the late Taisho period.

はじめに

道徳の教科化、道徳の時間が及ぼす児童生徒への影響力は多大である。このことは、時代を問わず、大正期の修身の時間にもあてはまる。大正時代の教育の特徴として、明治期の画一的な教育の打破や児童生徒の個性尊重、あるいは主体性を重んじる教育があげられるが、そのことは修身の教育においても例外ではない。大正期の児童生徒中心主義という教育思潮のなか、修身での学びを児童生徒それぞれの日常生活において生かしていたものと思われる。おそらく、当時の子どもの作文や習字などの作品にあたることができれば、ある程度、教育実践や社会の実情、児童生徒の学び、あるいは思考の形態を読み取ることができるのではないかと考えられる。

ところで、創立百十年を超える伝統校として知られる富山県高岡市立博労小学校（以下、博労校と略す）には明治時代より卒業記念に残された図画や作文、習字が保管されている。明治34（1901）年に創校した博労校の卒業記念作品は、20世紀の教育実践を今に伝える貴重なコレクションと言える。昭和戦時下に一部作品の欠落があるものの、現在まで約３万６千点に及ぶ作品が保管されている。

博労校所蔵の卒業記念作品のうち、作文および習字に関する先行研究は、同校の教職員により行われたものがある。習字に関しては、昭和47（1972）年に発行された『富山県教育史』のなかに「富山県児童作品史」[1]としてまとめられたものがあり、昭和56（1981）年に発行された『博労児童作品史』[2]には習字に加え、作文についてもとりあげられている。いずれも、児童作品の表現形態に着目しながら、時代毎に作品傾向が簡潔にまとめられているものであるが、道徳的見地から述べられたものではない。今日、道徳が教科化され、その重要性がますます問われるなかにあって、道徳の時間の影響力がいかなるものであったか、過去の資料から読み解くことは意義のあることではないかと考える。特に大正期は、自由な教育が展開された時代であり、現代と比較検討するに値すると思われる。大正時代の資料を読み解くこと

＊広島大学大学院教育学研究科

で、道徳の時間がもたらす教育効果を検証するものにもつながるのではないだろうか。

そこで、本稿では博労校に所蔵される卒業記念作品のうち、大正期に制作された作文作品（当時の綴方成績）、および習字作品（書方成績）をとりあげ、修身の時間がいかに児童に影響力をもたらしていたのかを検証する。卒業記念に残された作文や習字に修身の学習成果のみが具現化されるわけではないだろう。人格形成は日常生活を通じて育まれるものであるからである。しかし、道徳的価値に関する学びは学校教育における学習の扇の要に位置しており、そのもたらす影響力は少なくないであろう。現代の作品と比較するものではないが、過去の一時代の資料を通して道徳の時間の教育効果について学ぶ意義はあるのではないかと思われる。

１．博労小学校所蔵作品について

高岡市立博労小学校は明治34（1901）年、博労畳町尋常小学校として開校した。卒業作品を保存するという発想は、学校と卒業生とのつながりを深めようとする創校当時の教育方針に基づくものであったという。博労校が開校した当初は児童の出席率が伸び悩み、高岡市内小学校５校のうち、最下位にあった。そこで、同校では児童の出席率をあげるため、卒業生の写真とともに卒業作品を校内に掲示し、卒業生が作品にいつでも再会できるようにしたのである。卒業生とのつながりを深めた学校は彼らに手引きをさせ、就学拒否の児童を学校へ勧誘しようと努力したらしい。そのことが功を奏し、大正期に入る頃には、博労校の児童出席率は市内第一位になるまでに至ったという[3]。

明治35（1902）年３月に卒業した第一回卒業生は毛筆による軸を残した（図１）。そこには児童の氏名とともに「奉公」「勤勉」「忠義」「文武」などのことばが並び、当時の教育観を反映する表現がみられる。この軸が博労校における卒業作品のはじまりとなったわけであるが、その後、図画や綴方（作文）作品が残されるようになった。戦後、作文は卒業文集という形に変化したが、平成年代に至るまで図画と習字の個人作品の保存は継続されている。残念ながら、昭和戦時下の昭和16（1941）年度から昭和22（1947）年度までの７年間は作品が欠落しているが、同校の卒業作品は20世紀初頭から続く表現教育の一面をみることのできるコレクションとなっている。

博労校所蔵の卒業作品に関する先行研究では、まず、昭和40年代に同校教員であった小沢昭巳氏らにより、作品の整理が行われ、昭和46（1971）年に発行された『博労小学校史』に作品の簡単な概要がまとめられた[4]。また先にも触れたが、昭和47（1972）年に『富山県教育史』に掲載された「富山県児童作品史」において図画及び習字に関して同校の作品が紹介されている[5]。昭和56（1981）年に発行された『博労児童作品史』は当時の教員らによってつくられたもので、翌年中日教育賞を受賞したものである[6]。『博労児童作品史』には、図画作品を中心に図版が多く掲載され、図画、習字、作文の概要が掲載されている。

その後、平成12（2000）年度から３年間にわたり行われた東京学芸大学の研究グループによる調査では、図画作品について題材形式による作品分類と表現特長に関する概要報告がまとめられた[7]。さらに、平成22（2010）年より著者の一人、蜂谷昌之による図画作品の表現分析及び図画教育変遷に関する調査が続けられている[8]。また、調査と並行して作品資料のデジタルアーカイブ化の作業も進められており、同校の教育や学校と地域、卒業生との交流の場として年２回開催されている作品展等で活用されている。

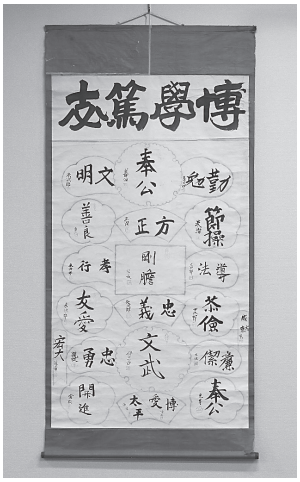

図１　第１回卒業作品（高岡市立博労小学校蔵）

２．近代日本における道徳教育

２－１　戦前の道徳教育

藤田（1985）は、明治５（1872）年に学制が公布され、西洋の長所を摂取しようとする啓蒙的な徳育方針がとられたが、明治13（1880）年に改正教育令が制定され、儒教主義の徳育方針へと変更されたことを指摘する。林（2009）は、道徳を教える教科を修身と呼ぶのは儒教の影響であるとし、学制期には伝統的な儒教教育ではなく、非常に開明的な政策がとられていたとしている。学制期には修身を教科の最後尾の６番目に記していたのが、改正教育令期には最初に位置づけられ、筆頭教科として重視されている。

大きな分岐点として、明治23（1890）年に渙発された教育に関する勅語があげられる。山田（2016）は、教育勅語は法令ではなく、天皇の言葉として、教育の方針が発表されたことに超法規的な重みと解釈の柔軟性を

帯び、時どきの政治状況に利用されやすい側面を指摘している。貝塚（2009）は、教育勅語が渙発されて以降、修身科の授業は、教育勅語に掲げられた徳目を教えることが基本になったとしている。

それでは学校現場において、修身科の授業がどのように展開され、児童生徒への定着が図られていたのだろうか。鈴木（1998）によると、教育勅語に関するアンケート結果（2086名の有効回答，平成６（1994）年－平成８（1996）年実施）をもとに、彼らが教育勅語に接したのは、主に祝祭日の儀式、修身の時間であったと分析する。また教師から暗記を促す指導のもと、主に小学校３年生から５年生の時期にかけて取り組み、中でも５年生が最も高く27.8％である。なお教育勅語の意味を理解の有無については、理解の割合が不理解の割合の約３倍を示す。しかし昭和12，13（1937,1938）年以降に小学校時代を過ごした対象者については、その差が見られないことから、理解の程度が低いと分析する。

また大正期後半から昭和11，12（1936,1937）年までに小学校を過ごした対象者は、教育勅語との日常的接触について、小学校の校長や教師の方針によって規定されたと指摘している。

堤（1997）は、修身教科書の国定化について、明治19（1886）年の教科書の検定制度が導入されたにも拘わらず、教育勅語の趣旨を貫徹するに至らず生ぬるいとの批判を取りあげている。このことは自由民権運動の高まりに対する、自由主義的思想からなる批判精神の芽を、小学校の時点で摘み取るものである。

和崎（2018）は、当初は教育勅語の読み方について、きちんと定められていなかったとしている。1910年代より文部省から児童に暗記させる教育が始まり、４年生用の国定修身教科書に教育勅語全文がまとめて掲載され、振り仮名が記されたと記している。

学制が公布され修身教育が始まり、当初、道徳教育は実学主義的な学びのもとで、国際感覚や個人意識が尊重されていたが、明治12（1879）年に教学聖旨が下賜されてからは、儒教に根ざした徳育主義の重視へと変容を遂げた。

２－２　修身教科書にみる内容の変遷

明治５（1872）年に学制が頒布された当初、初等教育として修身は６番目に位置づけられ、使用する教科書も欧米の著書を翻訳したものを使用していた。当時の国際情勢下では、列強の支配下に陥らないように、富国強兵のスローガンを掲げ、知識と技術、文化への学びに力点が置かれた。そこには近代市民倫理の内容が含まれ、後に徳育論争の引き金になる。

明治19（1886）年より教科書検定制度を導入、明治23（1890）年には教育勅語を渙発し、そして明治24（1891）年の小学校教則大綱の制定により、徳目主義に基づく系統的・計画的な修身科の指導が展開された。

貝塚（2009）は、国定修身教科書について、生活領域に関わる内容に着目し、以下の五期に分けて分析している。第一期を明治36（1903）年～明治42（1909）年、第二期を明治43（1910）年～大正６（1917）年、第三期を大正７（1918）年～昭和７（1932）年、第四期を昭和８（1933）年～昭和15（1940）年、第五期を昭和16（1941）年～昭和20（1945）年とする。唐澤（1955）を参照しつつ、生活領域を、家庭、個人、学校、社会、国家、国際社会、総括の７つの観点から分類する。

内容に関わる占有率について、個人に関するものが、第一期の41.7％から第五期の26.7％へと大きく減少している。同様に社会に関するものも、27.6％から15.8％に減少が見られる。その一方で、国家に関するものは、第一期の14.7％から第五期の37.5％に大きく増加している。

ここで大正年間の国定修身教科書の内容に着目すると、大正元（1912）年から大正15（1926）年あたり、第二期から第三期前半が該当する。中でも、大正デモクラシーによる自由主義・民主主義の広がり、児童中心主義による大正新教育運動が学校教育にもたらした影響は否めない。古川（1973）は、大正デモクラシー期には、政府の修身教育の方針に対して真っ向からの批判が自由主義の教育評論家からおこり、その後社会主義的教育論が展開されたと述べている。

本研究では、博労校に所蔵されている綴方成績（作文作品）（図２）及び書方成績（習字作品）を手がかりに修身科教育が及ぼす、作文及び習字作品への影響について分析を進める。文部省の政策が一地方都市の学校教育にどのように波及しているのか、大正期初期の大正２（1913）年度、中期の大正７（1918）年度、後期の大正14（1925）年度に着目しつつ、制作作品をもとに考察を進める。

３．道徳性からみた大正期児童作品

３－１　作文に見られる道徳性

大正２（1913）年度の児童作文では、道徳的価値に関わる内容を含む記述が読み取れるものは、全体の二割程度を占めるに過ぎない。勇気、誇り、伝統文化、勤労、忠義、国家、などの視点から、自らの気づきや考えを生活と関係づけて記述されている。

その他の作文は、季節、風景、日常生活、などに関わる題材が大半を占める。季節に関わるタイトルとしては、「春」、「夏の川」、「暴風雨」、「秋」、「秋雨」、「初冬の野外」、「冬の一日」、「雪」、「年の暮れ」、

などが挙げられる。なお、雪と題した内容が六件、の作文がある。

また、「春の景色」、「梅」、「花の公園」、「瀬戸内海」、「福寿草」、「稲田を望む」、「初冬景色」など印象深い光景を、作文として文字を通して表現している。時にはその光景が、児童の心を鼓舞したり、ある時は安らぎをもたらしている様子が読み取れる。

図２　卒業生綴方成績（高岡市立博労小学校蔵）

大正期前期にあたる大正３（1914）年度の作文に「所感」と題したものがある。その一部を抜粋すると、冒頭部の「三月この学校を去ってしまふと思ふと何となく心細くなる」については、卒業後への不安が表現されている。また終末部の「しかし今後上級に入ってこの学校に来た時はどんなであろうかと思ふとうれしいやうにも思われる」については、進学への不安と期待が入り混じった表現がなされている。ここからは、徳目主義に関わる道徳的価値を意識することなく、自らの思いが自然に記述できている。

次に大正中期では、道徳的価値に関わる内容を含む記述が読み取れるものは、全体の一割程度である。偉人（西郷、大久保、木戸）、報国、奮励努力、富国、忠誠、敬神の念、言葉遣い、などがあげられ、その思いを生活との関わりを通じて表現されている。家族、朋友、恩師に関わるタイトルも散見される。

その他の作文については、大正前期と同様に、季節、風景、日常生活に加え、出来事が挙げられる。児童にとってかけがえのないエピソードが、「入学試験」、「こけがえりの思ひ出」、「思出の記」、「楽しかった日」、「雪合戦」、「父なき私」、「僕の病気」などのタイトルから伺うことができる。こうした作文は、男子の児童に多いのが特徴的である。

大正中期の大正９（1920）年度の作文に「なき弟」と題したものがある。冒頭部で「四十九日の晩家内の者が佛前に座ってあのかへらぬ里へいった弟をとぶらった」とある。筆者は兄であろうか、弟を愛しく思う心模様が以下のように記されている。「私が學校から帰へると棒を捨ててまでもすがりついて「ボンボーゝ」といったが自分はそれを聞き入れないで家へはいってしまったあの時私はなぜおんぶしてやらなかったであろう、こんなに早く死ぬと言ふことが分かってゐたら一日中でもおんぶしたり、だいたりしてやるのであったのに等と思ふと（略）」の一節から、後悔の念に苛まれつつも、弟とのエピソードを宝物として節理しようとする光景が透けて見える。道徳的価値である家族を大切にする内容も汲み取ることができる。

また「開いてびっくり」と題した作文がある。これは児童自身が体験した恥ずかしいエピソードをまとめたものである。一部前半部を抜粋すると「横田町まで使ひに行った。すると町の中央に箱が落ちてゐる。よく見ると菓子箱だ。別に欲が起こったのではないが念の為に拾って見た。中を見ようと思ったが人にあやしまれるから、香で知ろうと思ったので鼻を近附けた。（略）」の表記から、つい欲を出した筆者であるが、実は箱の中身は馬糞であり、腕白小僧たちのいたずらにかかったのである。

後半部では、筆者が腕白小僧たちに同様の手口で仕返しをしている様子が記されている。内容としてはおもしろい出来事として表現されているが、筆者が悔しい気持ちを押さえきれずに仕返しをしているところは、卒業作文に残すほど印象的な出来事であったと考えられる。

最後に大正後期において、道徳的価値に関わる内容を含む記述が読み取れるものは、全体の一割程度である。「（国民としての）責任」、「家族愛」に関わるもの大半である。新たに「皇孫殿下の誕生日を祝ひて」の作文が三件見られ、これまでにはなかった時代背景を読み解くことができる。

その他の作文については、大正前期、大正中期と同様に、季節、風景、日常生活に加えて、卒業や学び舎をテーマにしたものが多い特徴が見て取れる。「卒業」、「卒業を前に」、「卒業が近づく」、「卒業に臨みて」、「我々は卒業せんとす」、などのタイトルが示す通り、児童にとって卒業がどのように位置づけられるのか、自らの思いが綴られている。学び舎についても、「懐かしき学校」、「教室の窓にもたれて」、「我々の学校」、「思出多き母校」、「住み慣れた教室」、「なつかしき机」、などのタイトルのもと、同様である。

大正後期の大正13（1924）年度の作文に「懐かしい学校」と題したものがある。学び舎に係る作文が多いと前述したが、内容は母校への思い出や誇りに思うことが、エピソードを交えつつ綴られている。冒頭部の記述を見てみると、「ものの道理も分からぬ幼い頃から入學して、幾多の先生に御やっかいになって、知識を附け、幾多のお友達と一しょに親ひ學んだ事が既に六ヶ年間立って、

今もや懐かしいゝ母校を去るべき日が近づいて居ます」と記され、先生方への感謝、仲間と共に過ごした様々な出来事、それらが走馬灯のように脳裏を駆け巡っている様子が伝わってくる。

終末部には、「あゝ何と懐かしいものだらう。母校を去るのは。卒業後もなほ、校の名誉を祈り、校門を出入する事を楽しみと仕様」の記述が見られ、母校を誇りに思う気持ちと、自らの人格形成に大きく寄与した学び舎を大切にするとともに今後も関わろうとする思いが滲み出ている。

ここまで大正期を前期、中期、後期に分けて、児童作文について、道徳的価値に関わる内容を含む記述に着目し、考察を進めてきた。明治23（1890）年に渙発された教育に関する勅語を踏まえ、国定修身教科書のもとでの修身科による教育が如何に浸透を深めていったのか、卒業時に残した作文を分析したところ、大正期においては顕著な特徴には至っていない。しかし、大正後期においては、前期や中期と異なり、日常生活に関わるエピソードなどの内容は減少している。昭和初期にかけては、さらに時代背景の影響を受けることになる。

３－２　習字作品に見られる道徳性

大正前期の大正２（1913）年度の習字作品を見てみると、道徳的価値に関わる題目が大半を占める。このことは、教員が書き方の手本をもとに、児童への指導が行われたことがわかる。

作品の題目は多岐にわたる。「富国強兵」、「義勇奉公」、「自立自営」、「貿易発展」などは、当時の国情を反映している。また日常生活のあり方に関わるものとして、「誠実勤勉」、「貞操不徳」、「節倹」、「忠孝」などがあげられる。なお「勤勉努力」、「至誠」、「忍耐」、「自立自営」、「人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」については、複数の作品が見られる。

おおむね児童一人一人が作品に選んだ題目がそれぞれ異なることから、多様な道徳的価値に関わる内容が、書き方の時間を通して学習されていたものと考えられる。

大正中期にあたる大正７（1918）年度の習字作品についても、道徳的価値に関わる題目が大半を占めている。

作品の題目は、前期と比べるとより多様さを増している。国情を反映した題目として、「堅忍持久」、「忠勇義烈」、「天地公道」、「共同一致」などがあげられる。「規律勤勉」、「修学習業」、「知識才能」、「礼儀作法」、「整頓掃除」などは、日常生活のあり方を示すものである。また「家庭和楽」のように、家族に関わる題材も取りあげられているのが特徴的である。なお男子児童が選んだ題目は四字熟語が大半を占めており、教員の指導によるものと推察する。

ここで女子児童が選んだ題目に着目すると、「敷島の大和心を人問わば朝日ににほふ山桜花」、「天は自ら助くる者を助く」、「古の書見る度におのが治まる国はいかにと」など、複数の作品が見られる。「和楽育児」、「不義にして富み且貴きは我に於て浮雲の如し」、「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまとひぬるかな」などからは、当時の家族のあり方に関わる内容が読みとれる。女子児童が選んだ題目は大半が和歌を含む長文である。このことは、男子児童と同様に、教員の指導によるものと考える。

ここまで習字作品について見てきたが、教員の指導のもとで、児童は書き方の手本を中心に題目を選んだものと考える。つまり道徳的価値に関わる題目が、選択されたものの大半を占めている。習字作品に取り組むと同時に、題目の意味を学習していたものと考える。

当時の社会情勢に目をやると、大正デモクラシーとして政治、社会、文化の多方面にわたり、自由主義的な運動や思想の流れが芽生えていた。しかし、博労校における習字の卒業作品の題目を見る限り、その影響を見とることは難しい。また大正７（1918）年度の習字作品については、教員が、尋常小学書き方手本（大正７年）を用いたことで、題目に多様性が増したと推察する。

何れの作品も、かなり練習を積み重ねた後で、清書されたことが分かる。作品の一文字一文字に、卒業を控えた児童の強い思いが表現されており、今もなおその迫力を感じ取ることができる。

おわりに

本研究では、大正期における児童の卒業作品である作文と習字作品について、道徳的視点から分析を加えた。対象は高岡市立博労小学校が所蔵している作文及び習字作品である。明治期から戦前までの道徳教育の内容の変遷を踏まえながら、道徳的視点から作品の内容を読み解くこと試みた。

その結果、習字作品については、尋常小学書き方手本が用いられ、徳育主義の内容が多く見られた。一方、作文については、大正期の後期において、徳育主義に関わるタイトルの数が、やや増える傾向にあることが分かった。さらに図画作品についても、大正自由教育という当時の教育思潮を反映した作品が残されている。

博労校には作文、習字作品のほか、図画作品も保管されているが、大正期の図画教育は大きな変革が起きた時であった。図画教育では明治時代より教科書の図版をお手本に描く臨画教育が行われていたが、大正期に入り、画家山本鼎が臨画を排斥し、自由画を推奨したのである。山本の主張は各地で開催された自由画展覧会やそれを伝

えるマスコミによって全国に浸透し、図画教育に新たな展開をもたらしたのであった。博労校の図画作品には山本鼎の自由画教育運動の影響がみられ、大正中期より後期にかけては自由画教育の主要な画題であった風景写生画が多く残されている。同校所蔵の卒業記念画には、大正自由教育という当時の教育思潮を推し進める動きがみられたのである。

貝塚（2009）は、国定修身教科書を五期に分けており、大正期はその第二期にあたる明治43（1910）年～大正６（1917）年、及び第三期の大正７（1918）年～昭和７（1932）年、に当てはまる。大正デモクラシーによる自由主義・民主主義の広がり、児童中心主義による大正新教育運動が学校教育にもたらした影響は否めない。

このことは主に卒業作品の作文を通して見とることができる。日常生活に関わる児童にとって心に刻まれた出来事をエピソードとして、感情を組み入れながら素直に表現されている。題材は、仲間との遊び、両親や兄弟に関わる出来事など、多岐にわたるが決して楽しいことばかりではない。仲間や家族との死別を通して、それが自分にとって何を意味するのか、自己内対話を介して表現されているものもある。作品の一つ一つが型にはまることなく、独自の表現方法が用いられており、そこからは自由かつ闊達な雰囲気を感じてとることができる。ただし道徳的価値に関わる内容に特化された教訓的な作品が、一部占めていることも事実である。これは、社会情勢の影響を受けたものと考える。

その一方で、習字作品については、作品そのものは児童中心主義教育の流れによる影響を受け、のびのびと文字が表現されている。かなりの練習量をこなした形跡が見てとれること、それは児童のものとは思えないくらいの出来栄えである。なお題材については、道徳的価値に関わる内容が大半を占め、尋常小学書き方手本を用いられたものと考える。

その後、実用性の面から採り入れられていた習字が、大正時代にかけて日常生活の近代化によって鉛筆が、用いられるようになって書き方教育へ影響を与え、精神性や芸術性という立場が徐々に色濃くなっていく。

註

1　富山県教育史編さん委員会編（1972）『富山県教育史下巻』、富山県教育委員会、pp.1003-1020

2　高岡市立博労小学校編（1981）『博労児童作品史』、高岡市立博労小学校、pp.140-154

3　同上書、p.130

4　博労小学校史編さん委員会編（1971）『博労小学校史』、高岡市立博労小学校

5　富山県教育史編さん委員会編、前掲書

6　高岡市立博労小学校編、前掲書。なお、『博労児童作品史』は発行翌年の昭和57（1982）年に、卒業作品の調査とその活用に対し、第14回中日教育賞を受賞している。

7　東京学芸大学のグループによる調査は、土屋昌義氏らにより行われ、『100年間の小学校図画作品の軌跡と表現分析』（研究成果報告書）に調査報告がまとめられている。

8　広島大学の蜂谷昌之による博労図画作品に関する調査については、いくつかの報告がなされており、大正期の教育事情については、「博労小学校所蔵児童作品にみられる自由画教育－大正期の作品に着目して－」、『大学美術教育学会誌』、第45号、pp.295-302（2013年）、「大正期における自由画への関心と図画表現の変容」、『美術教育学研究』、第46号、pp.213-220（2014年）などがある。

参考文献

天野貞祐（1937）『道理の感覚』、岩波書店

藤田昌士（1985）『道徳教育 その歴史・現状・課題』、エイデル研究所

林泰成（2009）『道徳教育論』、放送大学教育振興会

海後宗臣（1996）『図説 教科書の歴史』、日本図書センター

貝塚茂樹（2009）『道徳教育の教科書』、学術出版会

貝塚茂樹（2012）『道徳教育の取扱説明書』、学術出版会

貝塚茂樹（2013）『文献資料集成 日本道徳教育論争史 第６巻 修身教授改革論の展開』、日本図書センター

貝塚茂樹（2015）「近現代教育史のなかの教育勅語－研究成果の課題と検討－」、武蔵野大学教養教育リサーチセンター

貝塚茂樹，関根明伸（2016）『道徳教育を学ぶための重要項目』、教育出版

鈴木理恵（1998）「教育勅語暗記についての調査研究」、長崎大学教育学部紀要，教育科学54、pp.59-74

鈴木理恵（1998）「大正・昭和期の小学校と教育勅語」、長崎大学教育学部紀要，教育科学55、pp.53-68

鈴木理恵（1999）「教育勅語暗記の経緯」、長崎大学教育学部紀要，教育科学56、pp.47-61

鈴木理恵（1999）「教育勅語暗記の動機」、長崎大学教育学部紀要，教育科学57、pp.69-84

唐澤富太郎（1955）『教科書の歴史』、創文社

古川哲史（1973）『日本道徳教育史』、有信堂

博労小学校史編さん委員会編（1971）『博労小学校史』、高岡市立博労小学校

高岡市立博労小学校編（1981）『博労児童作品史』、高岡市立博労小学校
徳永正直，堤正史，宮嶋秀光（1997）『対話への道徳教育』、ナカニシヤ出版
富山県教育史編さん委員会編（1972）『富山県教育史下巻』、富山県教育委員会
和崎光太郎，森光彦（2016）『学びやタイムスリップ近代京都の学校史・美術史』、京都新聞出版センター
和崎光太郎（2018）『図録 近代日本の道徳教育』、京都市学校歴史博物館

謝辞

本論文作成のためにご協力いただきました高岡市立博労小学校教職員の皆様をはじめ、同校同窓会の方々、および関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

付記

本研究は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究（C）研究課題番号：26381210）による研究成果の一部です。本助成に対して感謝致します。